九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「ゐあかす」恋 : 『伊勢物語』二段考

川原田, 祐子
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9372

出版情報：語文研究. 88, pp.13-21, 1999-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「ゐあかす」恋

――『伊勢物語』二段考――

川原田　祐子

一

『伊勢物語』第二段の歌「起きもせず寝もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ」は、同時に『古今和歌集』巻第十三恋歌三巻頭歌でもある。

むかし、おとこ有けり。ならの京は離れ、この京は人の家まださだまらざりける時に、西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、かたちよりは心なんまさりたりける。ひとりのみもあらざりけらし、それをかのまめ男、うち物語らひて、帰り来て、いかゞ思ひけん、時は三月のついたち、雨そをふるに遣りける。

起きもせず寝もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ

（『伊勢物語』第二段）[注1]

弥生の一日より、忍びに人にものら言ひて後に、雨のそほ降りけるに、よみて、遣はしける

在原業平朝臣

起きもせず寝もせで夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ

（『古今和歌集』六一六番）[注2]

『伊勢物語』が、春雨の季節に忍ぶ恋の相手に逢瀬の後歌を贈ったという情景を描いたものであることは明白であろう。では、その明白な状況の核であるこの歌の「起きもせず寝もせで」とは具体的にどんな状態を指すのだろうか。

『古今和歌集』の歌の詞書からは、「弥生の一日」「雨」降る頃「人」に歌を贈ったということが看取できるが、詠み贈られた歌の実態は曖昧で、細部に至るまで詳らかであるとはいえない。[注3]『伊勢物語』や『古今和歌集』詞書が伝えるのは歌が贈られた状況であり、恋が成就した後の逢えない鬱屈を伝

える歌なのか、未だ逢瀬さえ遂げられない煩悶を訴える歌なのかすら、歌だけ見ては判然としない。

この歌は、あえてそうした、いずれともとれる詠みぶりのもとに詠まれ、当事者以外には歌の真意を汲み取れないよう仕立てたものという解釈[注4]は、平安朝におけるしたたかな恋愛感覚また社会感覚を端的に摘出した指摘といえようが、では、業平以後この歌はどう受け止められたのだろうか。

時代は下るが、『伊勢物語』注釈書類も、この歌句そのものについては、「おきてあかしつるやらん。ふしてあかしつるやらん」また「ぬるともなくおくるともなくて」と解すに止まり、それが何を意味するか、どういう状況下を指すのかには言及しない。

鳥（トフ）、おきもせずねもせでよるをあかしては春のものとてながめくらしつ、といへり。なにとよめる哥ぞ。

風（コタフ）、この哥、世間にはさかさまに申なすとかや。ゆゝしきひが事也。たゞ春の夜はさらでだに、あけやすきものときゝならひたるに、としごろ月ごろ、心つくしたる人にからうじてはじめてあひつれば、いとゞふすほどもなく、あへなくおきてあかしつるやらん。ふしてあかしつるやらん。あまりのあやなきにおぼえずと也。春のものとは、このはるさめのふるをみてよめり。ながめくらしつといふこゝろを哥のならひにて、ながめくらしつと、秀句によめる也。又したにおもへる心は、夜はきはめてあけやすかりつるに、もし又、よさりのひまをも見べきに、けふの日のながくてくれがたければ、夜のみじかく、日のながきを、春のならひと思ながら、なげきくらすぞとよめる也。

（『書陵部本和歌知顕集』[注5]）

（傍線は引用者による。以下同）

おきもせずねもせで　心は、只ぬるともなくおくるともなくて夜をばあかして、ひるは又春のならひのながめくらしたるさま也。長雨しくらしたる心もこもるべし。是業平の哥のさま也。前の言葉をよく工夫して思ふべし。余情無限者也。

（『伊勢物語肖聞抄』[注6]）

この態度は、『伊勢物語』現行注も変わらない。

また、『古今和歌集』現行注の一つは、この歌は「契りを結んで後になお慕い思う歌」[注7]として解すが、果たして本当に「契りを結んで後に逢えないで恋い慕い苦しむ歌」[注8]なのか否かは、詞書また『伊勢物語』の本文から判断するのは難しい。

しかし、ここに一つ、「おきもせず」歌を後の平安人がどう理解したかを示す例が『高光集』にある。

ある人むすめにものがたりするほどに、女のおやあさましとてもろともにゐあかしてのつとめてかへりて

こひやせむわすれやしなむぬともなくねずともなくてあかしつるかな

女のははかへし

ぬともなくねずともなくてあかす夜を恋もなこひそさら
ばわすれね　（『高光集』三二・三三番）[注9]

この二首の歌からは、女に逢いにいった際母親がともにそこに「ゐあかし」たため、二人の逢瀬は成らなかった状況が看取される。そこで男は、女に逢えたことは逢えたが、その母親同伴という奇妙な夜を指して、「ぬともなくねずともなく」と表現する。それに対して、その母も、その歌句をそのまま返歌に取り入れて、男と応酬している。この贈答歌から考えると、「ぬともなくねずともなく」というのは、逢ったが恋の成就には至らなかったことを指すと考えられる。

藤原高光は天慶三（940）年生～正暦五（994）年没で『高光集』の成立は『伊勢物語』『古今和歌集』に先んずることはないので、この三二・三三番歌はこれら二者以後の詠である。業平歌の「おきもせず寝もせで」を逐語的に引くわけではないものの、「ぬともなくねずともなく」という表現は、実質的にはこの業平歌の歌句をふまえたものだといえるのではなかろうか。

先に述べたように、『高光集』の贈答歌からは、女の母親が「もろともにゐあかして」恋の障害となり、逢瀬が成立しなかったことが諧謔味を帯びて表現される。その表現が、『伊勢物語』歌に近似する点を考えると、『伊勢物語』第二段および『古今和歌集』六一六番歌の内実はともかく、それ以後の平安人にとって、「おきもせず」歌は、相手に逢ったが恋の成就には至らなかったときの歌と解された時期があった可能性が考えられる。

では、『高光集』以外の同時代の作品においては、女の元で「ゐあかし」たまま夜を明かしたという例にどのような場合があるのだろうか。

二

それは、例えば次のような情景として描かれる。

そのひと（「少将のおもと」という女房）と、なかのたいのあらはなるにゐあかして、あさぼらけにつまどをおしあけたるに、そらのけしきもをかしうて、人のかたちもをかしう見えければ

あまのとを我がためにとはささねどもあやしくあかぬこちのみして　（『実方集』八五番）

詞書の「あらはなるに」は「人の目につく所」[注10]であり、女と一晩中そこに座って過ごした状況が示される。[注11]女と「ゐあかして」迎えた朝ぼらけの景色と、その光景のなか照らし出される女の容貌の幻想的な美しさがここでの眼目である。[注12]

また、『枕草子』は次のような場面を描く。

すくよかなるは、「夜ふけぬ。御門あやうかなり」など笑ひて出でぬるもあり。まことに心ざしことなる人は、「はや」などあまたゝびやらはるれど、猶ゐあかせば、たび

〳〵見ありくに、あけぬべきけしきを、いとめづらかに思て、「いみじう、御門を、こよひ、らいさうとあけひろげて」と聞えごちて、あぢきなく暁にぞさすなるは、いかゞはにくきを、親そひぬるは、猶さぞある。まいて、まことのならぬはいかに思らむとさへ、つゝまし。せうとの家なども、けにくきはさぞあらむ。

夜中、暁ともなく、門もいと心かしこうももてなさず、なにの宮、内わたり、殿ばらなる人〳〵も出であひなどして、格子などもあげながら冬の夜をゐあかして、人の出でぬるのちも、見いだしたるこそ、をかしけれ。有明などは、ましていとめでたし。笛などふきて出でぬるなごりは、いそぎてもねられず、人のうへなどもいひあはせて、歌などかたりきくまゝに、寝いりぬるこそ、をかしけれ。

（一七二段「宮仕人の里なども」）

里下がりした女房を訪ねた男が「ゐあかし」門が鎖せないため男の帰りを急かす親や門番の様子を批判し、それに対して、厳しく戸締まりもせず格子を上げて「ゐあかし」、男が去った後もその余韻を楽しむのがよいとする理想を掲げる。人と「ゐあかし」た夜明けの素晴らしさを称揚するのは『実方集』と相通じる感覚でもあり、「ゐあかす」男女の情感を示唆する好個の例といえよう。

よゐもやすぎぬらむと思ふほどに、沓のをとちかうきこゆれば、あやしと見いだしたるに、時〳〵かやうのをりに、おぼえなく見ゆる人なりけり。「今日の雪を、いかにと思やりきこえながら、なでふ事に障りて、その所にくらしつる」などいふ。「今日こん」などやうのすぢをぞいふらむかし。昼ありつることどもなどうちはじめて、よろづのことをいふ。円座ばかりさしいでたれど、かたつかたの足は下ながらあるに、鐘のをとなども聞ゆるまで、内にも外にも、このいふことはあかずぞおぼゆる。

あけぐれのほどに返とて、「雪なにのやまにみてり」と誦したるは、いとをかしき物也。女のかぎりしては、さもえ居あかさざらましを、たゞなるよりはをかしう、すきたるありさまなどいひあはせたり。

（一七四段「雪のいと高うはあらで」）

この例は、文脈からは女達の語らいの場に来訪した男の風流ぶりを描くように取れるため、恋人同士の場合とはいささか異なるが、互いに話の尽きない親密さから、その応用編と考えてよかろう。

そして時代がやや下ると、業平歌を意識したかと思われる詠作が出現する。

夜ごとにすのこにゐあかすを見いるることもなければ、かへりて、つとめて

おきてふしふしてはなきぞあかしつるあはれやすぐや人はねつらん

かへし

帰りつるほどはいぬるとみえつるをいつのまにかはおきてふしつる

風ふき雨ふる夜、れいのすのこにゐあかしてかへり

つとめて

わたつみによはともいはず世をすぐすあまのをぶねもかくはこがれじ

かへし

こがるらむをぶねもなみにしづむとてあま夜の風の吹きもきえつる

（『赤染衛門集』三四一～三四四番）

三四一～三四四番歌のうち、特に三四一・三四二番歌は業平の「おきもせず」歌を直接的に髣髴とさせる。三四一番歌を構成する「おき」「ふし」「あかし」、そしてそれを承ける三四二番歌を見るに、これらの歌の世界は業平歌を下敷きにした認識のもとに成立しているように思われる。そこからすると、『赤染衛門集』の歌は『高光集』歌の例と合わせて、「ゐあかし」た夜を業平の歌の色合いを込めて表現することが容認されていた時期の存在を意味しよう。

つまり、『高光集』に伝わる成就に至らなかった逢瀬の歌は、そのまま、『伊勢物語』第二段が具体的に何も語らない贈歌について、一つの理解が示された時期の所産であるとは考えられないだろうか。先に挙げた例から、『伊勢物語』以後の平安人にとって「ゐあかす」逢瀬は、愛情を伝える、また親愛が発露される格好の場でもあったことが窺える。そうした人々にとって、『伊勢物語』第二段の状況は「ゐあかし」た恋であると捉えられていたのではないか。

『伊勢物語』第二段で描かれた、業平と相手の女性の朧化された逢瀬の真相がどこにあるにせよ、この業平歌について、成就しなかった男女の逢瀬、つまり「ゐあかし」た恋の歌という理解が示された時期が、業平没後八〇年を隔てない頃からあったということを、この『高光集』歌は物語るように思われるのである。

三

さて『伊勢物語』以後『源氏物語』に至って、「まめ」なる人物の恋が何度も繰り返し描かれる。

中でもすぐに思い出されるのが、夕霧と薫それぞれの恋であろう。

まめ人の名を取りてさかしがり給大将、この一条の宮の御ありさまをなをあらまほしと心にとゞめて、大方の人目には、むかしを忘れぬ用意に見せつゝ、いとねんごろにとぶらひきこえ給。下の心には、かくてはやむまじくなむ月日に添へて思ひまさり給ける。

（夕霧巻　四・八九頁）(注13)

小野で夕霧に廉中に侵入されながら拒んだ落葉宮は、一条

御息所の死後小野から連れ戻されるが、あくまで拒んで塗籠に閉じこもる。

一方、薫も物語のなかで「まめ人」として認識される。

かむの君、奥の方よりゐざり出で給て、「うたての御達や。はづかしげなるまめ人をさへ、よくこそ面なけれ」と忍びてのたまふなり。まめ人とこそつけられたりけれ、いと屈じたる名かな、と思ゐたまへり。

（竹河巻　四・二五九頁）

その薫は宇治大君に心引かれ、数回にわたり逢瀬を持つが、大君の死に至るまで、ついに思いを遂げることができなかった。

夕霧の物語を薫と大君の物語の先蹤とみる指摘がなされて久しいが[注14]、ここで注目したいのは、夕霧・薫それぞれが「ゐあかす」恋を経験したということそのものである。

夕霧は最終的に思いを遂げ、薫は果たせないまま大君と死別するという結末の異なりはあるものの、そこに至るまでの過程で女君をかき口説いて夜を明かすという経験は両者に相通ずるものである。夕霧と薫は二人とも「まめ人」と形容されるが、そうした人物造型上の関わりは別にして、その恋が両者とも「ゐあかす」恋であったことは物語に明白に語られる。確かに、それらの逢瀬は、『実方集』や『枕草子』で見たような恋の余韻に浸るというには程遠い様相を呈していた。しかしながら、その形態において『源氏物語』では「まめ人」の恋は「ゐあかす」恋として描かれるという点で『伊勢物語』と軌を一にしているのである。

四

『伊勢物語』第二段は必要最低限の状況説明しか施さないため、詠まれた「起きもせず」の歌が何を告げるものなのか、結局は当事者にしかその真実は分からない。しかしながら、第一節で述べた、この歌を相手に逢ったが恋の成就には至らなかったときの歌とする考えに近い解釈は既にある。

それは、男女が過ごしたのは「いわゆる実事こそなかったものの、簾越しに言葉をかわした」[注15]夜であり、「起きもせず」歌は「会いは出来なかったものの、簾越しの一夜の物言いにすっかり感激し切った男がその余韻の中に漸く贈った、時間遅れの、しかも甚だ主観的な後朝の歌」[注16]という片桐洋一氏の論である。

歌がどの段階で贈られたかについては、現在のところ意見を持たないが、この「実事こそなかったものの、簾越しに言葉をかわした」という状況は言葉を換えれば、後の人々が理解した「ゐあかした」状態と呼べるものではなかろうか。

また片桐氏の「簾越（すだれ）しの、ほんのちょっとした会話」と解釈する『伊勢物語』本文「うち物語らひて」は、他作品に用例がなく未だその指すところが判然としない語だが、その具

体的状況はあるいは「ゐあかす」とも何らかの関わりを持つのかもしれない。(注17)

さて、『伊勢物語』第二段の「まめ男」とはどんな男なのだろうか。現行諸注にいう、恋にまじめ、女性に誠実といったことに止まるのだろうか。そこからもう一歩進めて、その人物が「恋においても宮仕えとは無縁でいられぬ男の謂」(注18)であるとするならば、『源氏物語』の「まめ人」の相貌はなんとそれに似ることであろう。

夕霧はいうまでもなく秀でた律令官人として「宮仕え」の中枢に位置し、また薫も冷泉院の寵ついで当代の女二宮に婿取られる帝寵を被り、「宮仕え人」の中でも重きを為す人物であった。(注19)

その「まめ人」二人ともが「ゐあかす」恋を体験している。それが『源氏物語』の「まめ人」の恋であり、同時に『源氏物語』における「まめ人」の恋に対する理解の所産であった。しかしそれは『源氏物語』にして初めて芽生えた新しい恋の形ではなく、はやく『伊勢物語』に描かれた「まめ男」の恋と期せずして通じているのであった。(注20)

注1　本文は『新日本古典文学大系　伊勢物語』による。

2　本文は『新日本古典文学大系　古今和歌集』による。

3　この状況は業平の家集においても同様である。『在中将集』尊経閣文庫蔵（『私家集大成』中古Ⅰ）（※『新編国歌大観』（第三巻　私家集編Ⅰ）所収「業平集」も底本同じ。）七番

やよひのついたちころ、雨ふる日、人の許に

おきもせすねもせてよるをあかしてははるのものとてなかめくらしつ

『在原業平朝臣集』神宮文庫蔵／詞書なし（『同』）八番

おきもせすねもせてよるを明しては春のものとて詠くらしつ

『業平集』書陵部蔵「三十六人集」（『同』）五五番

ある女の、この京にありしに、やよひついたちころ、あめふりしにやりし

おきもせすねもせてよるをあかしてははるのものとてなかめくらしつ

『業平集』正保版「歌仙歌集」／詞書なし（『同』）八番

おきもせすねもせてよるをあかしては春の物とてなかめくらしつ

『業平集』書陵部御所本（『新編国歌大観』第七巻　私家集編Ⅲ）五四番

ある女のこの京にありしに、やよひのついたちごろ、あめふりしにやりし

おきもせずねもせでよるをあかしてははるのものとてながめくらしつ

4　今西祐一郎「「用心」の歌―『伊勢物語』二段管見―」（王朝物語研究会編『論叢伊勢物語1―本文と表現―』新典社　平成一一年九月）

5　『伊勢物語の研究〔資料篇〕』（片桐洋一　明治書院　昭和四四年一月）一三七頁。

6　前掲注5五九四頁。

また、他の注もこの歌の具体的内容に触れているものはない。

『冷泉家流伊勢物語抄』（前掲注5二九八頁）

○おきもせずねもせずと云は、物をおもへば、おくべきひるもおきられず、ぬべき夜もねられずといふ也。

『伊勢物語宗長聞書』（前掲注5六五六頁）

当流には、只ぬるともなく、おくるともなくて、夜をあかし、ひるは又春の物とてながめあかし暮たる躰也。

『伊勢物語闕疑抄』（前掲注5七三七頁）。

夜はおきもせずねもせぬやうにてあかし、ひるは春の物とてながめくらしつと云也

『勢語憶断』（『契沖全集』久松潜一編　岩波書店　昭和四九年四月）第九巻一三頁

帰り来てその日のくれなとにつかはす心ならは、もろともにきしかたの心つくしをかたり、行末を契りなとしはかなき短夜は、おくともなくぬるとも」なしに明て、

7 前掲注2脚注一九一頁。

8 前掲注2脚注一九一頁。

9 『高光集』（『新編国歌大観』第三巻　私家集編Ⅰ所収）による。以下、私家集の引用は『新編国歌大観』第三巻（私家集編Ⅰ）による。

10 『実方集全釈』（私家集注釈叢刊五　竹鼻績校注・訳　貴重本刊行会　平成五年一〇月）一四四頁【語釈】参照

11 また、次のような例もある。

かうしのつらによりゐあかしたるあしたに、おなじ人（一二一番「人にはじめてきこえける」）

あけがたきふたみのうらによるなみのそでのみぬれしおきつしま人　（『実方集』一二二番）

また、次は女が一人で「ゐあかし」た例である。

もとのめをやむごとなきものには思ひながら、又しる人おほかりけるに、もとをばはしのまにて物がたりなどして、ここにゐたまへれ、いままゐらむとていにければ、まこととて、むしろのかぎりにゐあかして、あか月にかへりきたるに、いたのうへにさへはかりおかれてひえにけり、とうらみければ

ことわりやしたはさこそはひえつらめきみにしくべきおもひなければ　（『仲文集』二九番）

12 本文は『新日本古典文学大系　枕草子』による。次の『枕草子』の例は、複数の女性の元に複数の男性が訪れる場面である。

屋のいとふるくて、瓦葺なればにやあらむ、あつさの世にしらねば、御簾の外にぞ夜も出で来ふしたる。ふるきところなれば、百足といふ物、日ひとひ落ちかゝり、蜂の巣のおほきにて付きあつまりたるなどぞ、いとをそろしき。殿上人日ごとにまいり、夜もゐあかして物いふをきゝて、「豈はかりきや、太政官の地の、いま夜行の庭とならんことを」と誦しいでたりしこそ、をかしかりしか。

（一五四段「故殿の御服のころ」）

13 本文は『新日本古典文学大系　源氏物語』による。猶以下用いる『源氏物語』本文も同書に依り、巻・頁数を併記する。

14 藤村潔「源氏物語夕霧の巻試論」（香川県高等学校国語研究会誌『国語』一七号　昭和三九年一一月、後に『源氏物語の構造』「Ⅱ、宇治十帖の構想成立過程細論　六、宇治十帖の予告」桜楓社　昭和四一年一一月）石田穣二「夕霧の巻につい

て」（昭和女子大学『学苑』三一三号　昭和四一年一月、後に『源氏物語論集』所収　桜楓社　昭和四六年一一月）

15 片桐洋一「『伊勢物語』冒頭三章段の成立と主題」（『中古文学』第二九号　昭和五七年五月、後に『伊勢物語の新研究』所収　明治書院　昭和六二年九月）

16 前掲注15片桐論文

17 前掲注15片桐論文は、「うち物語らふ」は「物語らひす」「語らふ」「物語す」の例から「契る前、実事の前の言葉のやりとりをいう場合がある」と説く。また『古今和歌集』詞書「ものら言ひて」は「簾や凡帳を隔てながらも夜もすがら「物言ひ」明かしたとも解し得る」とする。

18 今西祐一郎「「まめ男」の背景―『伊勢物語』試論―」（福井貞助編『伊勢物語―諸相と新見―』風間書房　平成七年五月）

19 そう考えると、総角巻で薫が大君の死の直前に「豊の明はけふぞかしと、京思ひやり給。」と京を思い遣る場面は別の意味を帯びてこよう。

20 薫と大君の逢瀬は既に森一郎氏によって『伊勢物語』第二段との類似性が指摘されている。

「まめ男」薫は「泣きたまふ」大君をいとしんで、女の心ゆるぶ折を待とうとする。（略）橋姫巻のかいまみこのかたの「忍びがたくなりゆく」恋心を「いと多く聞こえたまふ」（総角巻二二六頁）。『伊勢』第二段の恋の一夜も、さような綿々たる「うち物語らひ」であったろう。

ひそひそとつづく語り合い。ひっそりとしたそのけはいに、女房たちが大君と薫との間に実事ありと思ったのは、無理からぬところ。まさに外から見れば、夫婦の風景なのだった。起きていたというわけでもない、しかしろくに寝もしないで、ひっきょう寝ずに、一夜を語り明かしてしまった。「はかなく明け方になりにけり」（総角巻二二七頁）。「起きもせず寝もせで夜を明かし」たのであった。

（『源氏物語考論』（笠間叢書207　笠間書院　昭和六二年九月）二六八頁）

（かわはらだ　ゆうこ　九州大学大学院博士後期課程）